

デジタル一本化は 非効率で無意味

探し物に時間がかかって集中力が途切れてしまう。——。誰しも経験があるでしょうが、これほど大きなロスはありません。二三年前、ジャーナリストとして仕事場を設けたときに重要な課題となったのが、文献や資料を探す時間の短縮でした。いま、私の書斎では最短二秒、最悪でも五秒までに必要な資料へアクセスできます。執筆中の仕事に関する資料はデスクの足元に集めていき、これから取りかかるものは優先順位に応じて書棚に並べています。切り抜きやメモを入れたファイル袋と関連書籍は、仕事ごとにまとめておく。そして、一日の最後にはすべて所定の位置に戻し、資料は衣装ケースに収納して倉庫にしまいます。きれいな好きなわけでも見栄えを気にしているわけでもありません。私は記憶力が悪いので、何がどこにあるか忘れてしまう。これも必要に迫られてつくり上げた仕組みです。皮肉ではなく、記憶力に自信がある人ほどデスクまわりが乱雑になるはず。どこに何があるか覚えていれば、整理の必要はありませんから。資料整理で重宝するツールの一つがコピー機です。書籍から気になる部分を抜粋するのも簡単ですし、ジ

ヤールの分類に迷う資料はコピーして複数の袋に入れて片付けます。ただし手軽にはウオームアップタイムがゼロ、つまりスイッチオンですぐに使える機種である必要があり。私が愛用しているのは、キヤノンの「ファミリコピー（またはミニコピー）」のシリーズです。全資料のデジタル化を提唱している人もいますが、デジタルへの二元化は、断じて効率的ではないと考えています。現在の蔵書は約三万冊。過去の仕事で参考にした本はすべて保管しています。それに加え、裁判調書など何冊もの高さになる紙の資料がいくつもある。それらをすべてスキャンすることは現実的ではありませんし、無意味です。資料の置き場がなくて、やむなくデジタル化するというのがわかりませんが、二元化が目的になつては本末転倒です。いまのところ必要な情報を即座に一覧できるという点で、紙に優る資料はありません。ネットは速報性に優れているものの不正確な情報が少なくない。やはり専門家やプロの編集者が携わった書籍が基本的な資料であるのは変わらないし、辞書や辞典、白書などの「レファレンス」もまだまだ手放せません。もちろん今後、デジタル資料は増えていくでしょう。私も、裁判の判例や学術論文、新聞記事などのデータベースには毎月数万円を支払っています。いくつかの

「情報洪水を テキパキさばく 先端ツール



仕事を残さない「棚別仕分け」

デスクの後ろの書棚には、優先順位ごとに仕事の資料をまとめている。床上に置いているのは、すべて今日中に済ませる資料。翌日、翌々日の資料もすでに書棚にまとめてある。



一生分を確保済みの希少キーボード

文字入力にはNECが発売していた「M式」を愛用。日本語発音の特徴にそって左手側に母音、右手側に子音がある。現在、8個を保有。入手時、オークションで10万円以上した希少品。

20

徹底された「機能美」——。その基準となっていたのは、「おれを知る」ことだった。

作家・ジャーナリスト
日垣隆
Takashi Higaki



山川 徹=構成
小原孝博=撮影